

浜口 尚 (2005)

「海の蛮人騒動記 - シー・シェパードによる鯨・イルカ類追い込み漁仕切り網切断事件をめぐる - 」  
『園田学園女子大学論文集』第 39 号、41-52 頁。

2003 年 11 月 18 日、和歌山県太地町の畠尻湾で外国人 2 人が新宮警察署員に威力業務妨害容疑で逮捕された<sup>1)</sup>。彼らは太地漁協所属の太地いさな組合が仕切り網の中に捕獲してあったハナゴンドウを逃がそうとして網を切断したのであった[写真 1]。本稿はこの事件の顛末を綴ったものである。

## 1. 事件の経緯

2003 年 10 月 5 日、太地いさな組合の漁船 13 隻がスジイルカ約 60 頭を畠尻湾に追い込んだ<sup>2)</sup>。10 月 1 日に始まった鯨・イルカ類追い込み漁の 2003 年漁期の幕開けを告げる初漁であった。追い込まれた鯨・イルカ類は普通は翌朝解体され、市場でのセリを経て、大阪方面に出荷されていく。同時に市場の前にある漁協直営のスーパーにも新鮮な鯨・イルカ肉が並ぶ。例年だと追い込み漁の漁期が終わる翌年 4 月末までこういう日々が静かに流れていく。

ところが 2003 年は事情が違った。シー・シェパード (Sea Shepherd Conservation Society, 第 2 節で取り上げる) の活動家 2 人が湾を見下ろす高台に潜み、他の 1 人が旅行者を装って町内に滞在していたのであった<sup>3)</sup>。

翌 10 月 6 日早朝から湾内で始まったスジイルカの血抜き作業をこれら 3 人が写真撮影を試み、それを制止しようとした追い込み漁関係者との間で小競り合いとなり、新宮警察署員が出動する騒ぎとなった<sup>4)</sup>。

小競り合いの最中、活動家の 1 人、ブルック・マクドナルド (後で必要なため実名を記す) がシー・シェパードのホームページによれば「下着」の中にフィルムを隠して持ち出し<sup>5)</sup>、スジイルカの血抜きの場面や真っ赤に染まった海面の写真 (多分デジタル処理で赤色を強調している) などがシー・シェパードのホームページを飾った<sup>6)</sup>。

この写真撮影の成功とホームページでの公開がシー・シェパードの活動を勢いづかせ、その後もこれら 3 人は水中で石を打ち鳴らすなどして<sup>7)</sup>、いさな組合の追い込み漁を妨害しつづけた。

そして冒頭で述べたように、11 月 18 日に遅れて太地町にやってくるアリソン・ランス・ワトソン (これも後で必要となるため実名で記す) ら 2 人が、いさな組合が追い込み捕獲してあったハナゴンドウの仕切り網を切断して新宮警察署員に威力業務妨害容疑で逮捕されたのであった。本逮捕を受けて、翌 11 月 19 日、太地いさな組合はこの 2 人を新宮警察署に器物損壊容疑で告訴した<sup>8)</sup>。

結局、逮捕された 2 人は 22 日間拘留された後、12 月 9 日、威力業務妨害と器物損壊の罪で略式起訴され、それぞれ罰金 50 万円と 30 万円を支払って釈放された<sup>9)</sup>。

この逮捕事件をシー・シェパードはどうみているのであろうか。少し長くなるが同団体のホームページから引用しておこう。

シー・シェパードがアリソンの罰金 50 万円とアレックスの罰金 30 万を支払ったならば彼らは釈放されます。アリソンの罰金は約 5000 米ドル、アレックスの罰金は約 3000 米ドルに相当します。彼ら 2 人は 1

頭あたり 533 ドルでイルカを屠殺から救ったこととなります。これこそ実際に成果のあった「イルカを養子にしようプログラム」です。...イルカを救うという「犯罪」にこのような高額な罰金が課せられるとは全く信じられません。...この報告を読んだ方はぜひ「太地防衛基金」に寄付をお願いします。小額でも結構です。そうすればアリソンとアレックスがクリスマスまでに釈放されることに役立ちます<sup>10)</sup>。

シー・シェパードはアリソンら 2 人が仕切り網を切断することによってイルカ 15 頭を救ったとその戦果を強調しているが<sup>11)</sup>、実際には仕切り網は二重になっていたためハナゴンドウは 1 頭も逃げ出していないのである。しかしながら、ホームページ上ではイルカ 15 頭が 1 頭 533 ドルで救出されたことにされ、格好の資金集めの材料となるのである。

しかも、同団体は略式命令を受け、罰金を支払い、アリソンら 2 人が釈放された後、ホームページ上で仕切り網の切断場面のビデオを公開している<sup>12)</sup>。彼らにとっては大手柄であるが、もし正式の裁判になっていたならば犯罪の動かぬ証拠となるビデオである。メディアを利用した PR 活動と資金集めのうまさはさすがである。

メディアを利用した派手なパフォーマンスで資金を集めるシー・シェパードとは一体いかなる団体なのだろうか。次節では同団体を取り上げる。

## 2. ポール・ワトソンとシー・シェパード

「鯨たちが生き延びて繁栄し、アザラシたちが生きて子どもを生み続け、そして私が彼らたちの繁栄を確実にするのに貢献できるならば、私は幸せです」<sup>13)</sup>

「人間の暴虐の恐怖から解放されて自由に生きる鯨・イルカの権利は、どの人間の文化の権利よりも優先する」<sup>14)</sup>

「漁師の何人かがイルカを突き刺し、切り裂いている時に彼らがサディスティックな喜びを誇示しているのを見て取れた」<sup>15)</sup>

以上全てシー・シェパードの設立者で代表者でもあるポール・ワトソンの言葉である。シー・シェパード(正式名称: Sea Shepherd Conservation Society)は 1977 年にグリーンピースの設立者の 1 人で役員でもあったポール・ワトソンが、組織運営上の対立からグリーンピースを脱退して設立した団体である。

同団体は海洋環境を保護することを目的とし、彼らのいう不法漁業活動、特に捕鯨、アザラシ漁、カメ漁、フカヒレ漁を世界の海から根絶することに活動の中心を置いている<sup>16)</sup>。言うまでもないことであるが、同団体の活動にはポール・ワトソンの個性が強く反映されている。

ポール・ワトソンは 1950 年にカナダで生まれた。9 歳にして罟猟師からビーバーを守るために足罟の破壊を始めた。1969 年、米国アリューシャン列島アムチトカ島での核実験反対運動に同島の海洋生物を守るために参加。同反対運動を契機として 1972 年にグリーンピースの結成に参画し役員となっている<sup>17)</sup>。

グリーンピース結成以後、1973 年にサウス・ダコタ州ウンデッド・ニーでのアメリカ先住民蜂起事件に参加、後に先住民スーの養子となる。1974 年にグリーンピースで最初の反捕鯨キャンペーンを組織。1975 年にカリフォルニア州沖でソ連捕鯨船団の活動をゴムボートで妨害。1976 年にはグリーンピースで

最初の反アザラシ漁キャンペーンを組織。反アザラシ漁キャンペーンをめぐる組織運営上の対立から1977年にグリーンピースを脱退し、シー・シェパードを結成している<sup>18)</sup>。

シー・シェパード結成以降は活動をより過激化させている。反捕鯨活動だけに絞っても以下のようなものがある<sup>19)</sup>。

1986年 アイスランド、レイキャヴィクで捕鯨船2隻を沈没させると共に鯨肉加工施設を破壊する。

1992年 ノルウェー、ロフォーテン諸島で停泊中の捕鯨船を沈没させず。

1993年 ノルウェー、グレスヴィクで停泊中の捕鯨船を沈没させず。

1997年以降は米国ワシントン州に居住する先住民マカーのククジラ捕鯨再開の阻止に取り組んでいる。1998年には元々はノルウェー海軍が保有し、シー・シェパードが25万ドルで購入してあった中古の小型潜水艦(全長8.2m)をククジラが怖がるシャチに似せて塗装し、それを用いてマカーのククジラ捕鯨の妨害を試みようとしている<sup>20)</sup>。なお、マカーは1999年5月17日、1928年以来約70年ぶりにククジラ1頭の捕獲に成功している<sup>21)</sup>。

先住民の権利擁護のためウーンデッド・ニー占拠事件に加わったポール・ワトソンであるが、その先住民が捕鯨の権利回復のために立ち上がると今度は鯨を擁護する側に立つ。「人権か。鯨権か」というような問いかけはしたくないが、彼にとっては「鯨権、イルカ権、アザラシ権」が全てに優先するのである<sup>22)</sup>。

シー・シェパードはその派手な破壊活動から時として「エコ・テロリスト集団」<sup>23)</sup>とも称されているが、同団体自体は「保全の名の下でのエコテロリズムや全ての暴力を非難するし、また残念に思う」<sup>24)</sup>とし、「非暴力の原則」を固守している。

但し、同団体のいう「非暴力の原則」とは「全ての感覚を有する存在に対して肉体的な危害を加えないこと」<sup>25)</sup>である。この文章は「全ての感覚を有しない存在に対しては物理的な損害を与えてもよい」と読み替え可能である。その結果、「非暴力の原則」に矛盾することなく、捕鯨船や鯨肉加工施設の破壊、鯨・イルカ類の捕獲仕切り網の切断が可能となるのである。

では、シー・シェパードはテロリスト集団なのであろうか。「テロ」「テロリスト」「テロリズム」などの定義は実は非常に難しい<sup>26)</sup>。状況によっては「テロリスト」が「自由の戦士」、「民族解放者」にもなりうるからである。「テロ」には元々、否定的側面と肯定的側面の両面価値が備わっており、状況によって、あるいは視点によって、悪の権化にもなれば正義の味方にもなりうる可能性を秘めているからである。そのような肯定的側面をも含みうる「テロリスト」の肩書きを彼らには与えたくない。

筆者は彼らをテロリスト集団とは考えない。理由は簡単である。テロリスト集団ならば事前あるいは事後に警察や大使館に連絡を取り、身辺の安全確保を要請しないからである。シー・シェパードの活動家は追い込み漁関係者との間で小競り合いがあった際、自ら警察を呼んでおり、また同団体は駐日アメリカ、イギリス、カナダの各大使館に活動家の安全確保を要請している<sup>27)</sup>。彼らのことは法を犯すまでは「日和見集団」、犯した後は「犯罪者集団」と呼べば十分である。

その昔、デクスター・ケイトなる米国人が日本にやってきた。日本で初めてイルカ救済のために破壊工作を行った外国人である。1980年2月、ケイトは長崎県壱岐島の勝本町でイルカ類約1400頭が閉じ込められていた網を切断、250~300頭のイルカを逃がし、威力業務妨害で逮捕された。彼は地検の略式裁判を受け入れず、正式裁判を要求し、公判では堂々と「動物の権利」を主張した。結局、彼は3か月間

未決拘置された後、威力業務妨害で執行猶予付きの懲役 6 か月の有罪判決を受け、国外退去処分となった<sup>28)</sup>。

同様の犯罪で逮捕されたアリソン・ランス・ワトソンら 2 人は検事との取引に応じ、略式命令を受け入れ、罰金 80 万円を支払って、クリスマス前に家族のもとに帰っている。主義主張のために 3 か月以上も拘置所でがんばったデクスター・ケイトと比べてみれば、22 日間でケツをわったシー・シェパードの活動家の日和見具合は歴然としている<sup>29)</sup>。

そのような日和見集団のシー・シェパードであるが、金儲けには長けている。太地から引き上げた直後の 2004 年 1 月、「2004 年反アザラシ漁キャンペーン」を開始している。本節を終えるにあたって再びホーム・ページから彼らの言葉を引用しておこう。

シー・シェパードは私たちの船と乗組員が 3 月の終わりまでに氷盤に到達するのを助けてくれるスポンサーを募集しています。氷盤までの往復には 200 トンの燃料が必要です。燃料は 1 トン、300 ドルです。6 万ドルでタテゴトアザラシが子育てする氷盤まで私たちの船と乗組員を派遣することができます。...300 ドルの寄付で 1 トンの軽油が買えます。150 ドルの寄付で 0.5 トンの軽油が買えます。...100 ドル以上の寄付でポール・ワトソンのサイン付きの著書『アザラシ戦争 - タテゴトアザラシと共に最前線で 25 年 - 』をお送りします<sup>30)</sup>。

### 3. 太地町と鯨・イルカ類追い込み漁

太地町は紀伊半島の最南端域に位置する面積 5.96 平方キロメートル、人口 3832 人(2003 年)という小さな町である。太地では 1606 年に鯨を銚で突き捕る「突き捕り法」によって捕鯨が創始され<sup>31)</sup>、それから約 400 年、21 世紀の今日においても捕鯨は続いている。

2003 年現在、日本においては農林水産大臣および関係道県知事の許可のもと、「小型沿岸捕鯨」「突きん棒漁」「追い込み漁」の 3 つの漁法によって捕鯨が行われている<sup>32)</sup>。統計資料の入手可能な 2001 年の捕獲実績は 3 漁法合わせて 1 万 8342 頭である[表 1]。

追い込み漁とは鯨・イルカ類の群れを漁船で沖側から取り囲み、船縁や水中に入れた鉄パイプを叩くなどして不快な音を水中で反響させて、群れを湾(港)内に追い込み、生け捕りにする漁法である。2003 年現在、追い込み漁は日本では太地町と静岡県伊東市富戸の 2 地域に許可が与えられているが、富戸では数年に 1 度ぐらいの捕獲しかなく<sup>34)</sup>、組織的・体系的に行われているのは太地町だけである。

太地町には 2380 頭の捕獲枠が与えられており、太地いさな組合所属の 13 隻の船(27 人)が追い込み漁に従事している。統計資料の入手可能な 1993 年から 2001 年までの 9 年間の捕獲実績は 1 万 1931 頭、年間平均 1326 頭である[表 2]。

太地町は小型沿岸捕鯨、突きん棒漁、追い込み漁の 3 漁法全てが行われている日本唯一の地域であり(まさしく日本一の捕鯨の町である)、ハナゴンドウは 3 漁法のいずれもによって捕獲されている。それゆえ、3 漁法全てがシー・シェパードから狙われる恐れがあるが、今回は追い込み漁しか攻撃対象とならなかった<sup>36)</sup>。理由は何故か。答えは簡単である。小型沿岸捕鯨と突きん棒漁は洋上で血抜きを行っており、ポール・ワトソン好みの血まみれのシーンを簡単に撮影できないからである<sup>37)</sup>。

これに対して追い込み漁の血抜きは湾内で行われている[写真 2]。湾一帯は吉野熊野国立公園太地地区の一角を占め、湾沿いには遊歩道があり、湾奥の浜は夏には海水浴場となる。また、湾を見下ろす

高台(ここからシー・シェパードが写真やビデオを撮影した)も公園として整備され、そこに至るまで散策道も設置されている。のぞき趣味と悪意があればセンセーショナルな報道は簡単にできる場所なのである。かつても血抜き場面などが週刊誌によってカラー写真つきで報道されたことがあった<sup>38)</sup>。今回、シー・シェパードはインターネットの特徴を悪用して、追い込み漁の一面だけを誇張、曲解し、金儲けの種にしたのであった。なお、事件後、高台の一角は危険防止のため、網が張られ立ち入り禁止となった[写真3]。

地元民にとって追い込み漁は日常のなかで行われている捕鯨という町の生業の一コマに過ぎない。血抜きを行えば血が流れる、当たり前のことである。ことさら見に行くものではないし、たまたま見えたとしても特段のことではない。これは牛でも豚でもカンガルーでも、食料として利用するならば同じことである。

追い込み漁が行われている湾から3分歩けば、太地町の捕鯨の文化と歴史を知ることができ、同時にオルカのショーも楽しめる太地町立くじらの博物館があり、逆方向に3分歩けば鯨のフルコース料理を堪能できる町営の国民宿舎もある。太地とはそういう鯨と捕鯨の町なのである。この基本的な事実は少なくとも日本国民には正しく理解してもらいたいものである。

しかしながら、日本の一部の鯨・イルカ類愛護団体はシー・シェパードの太地攻撃に便乗して鯨・イルカ類追い込み漁の中止を求めるキャンペーンを行っている。

たとえば、「IKAN」(イルカ&クジラ・アクション・ネットワーク)は2003年10月31日付の文書で「残念ながら『太地』の名前は、残虐なイルカ猟を行うところとして国際的にも知れ渡るようになりました」と記し、和歌山県知事あてに「太地イルカ捕獲中止を求める要望書を送ろう!」というキャンペーンを抗議文のひな型をつけて行っている<sup>39)</sup>。

同様な抗議文のひな型をつけたキャンペーンは「エルザ自然保護の会」<sup>40)</sup>も行っている。同会は「海外の一部の団体の違法な抗議行動には、参加していません」としながらも、「太地の場合も、海外からのいわゆる外圧が、イルカ猟阻止への大きな力となっていることが分かっており、イルカ・クジラ問題は外圧を上手に利用しなければ解決できないものと考え」とも述べ、湾内での血抜き場面などを掲載しているシー・シェパードのホームページにリンクさせているのである<sup>41)</sup>。

これらの鯨・イルカ類愛護団体は建前上、シー・シェパードの直接的な暴力行為を批判しているが、結局のところはメディアを利用した間接的な暴力行為を積極的に推進しているのである。

私たちはシー・シェパードのみならず、上記のような日本の鯨・イルカ類愛護団体にもきっちり反論しておくべきなのである。

#### 4. まとめ - 安全な鯨・イルカ類の追い込み漁をめざして -

シー・シェパードのメンバーが太地町に滞在中の2003年11月、同団体はホームページ上で太地町から届いた1通のメールを日本語に翻訳したうえで公開している。同メールから引用してみよう。

私は太地に住む教師です。私はこの町のことをよく知っており、イルカと鯨を殺す計画を前もって知ることができます。私は以前、イギリスのグリーンピースに詳細な連絡をつけたことがあります。...だけれど、ここに来て撮影をしたり抗議をするということが私にわかっていたならば、カメラマンの知らない、殺しの海を見渡せる丘の最良の場所を教えてあげることができたのです。もし、ボランティアがふたたび、太地に来る場合は私にお知らせください。そうすれば私は手助けをいたします。しかしこのことはご内

密に<sup>42)</sup>。

シー・シェパードは内密扱いを望んだこのメールを公開した。同団体のホームページを開けば、このメールの差出人の実名、住所、メール・アドレス、携帯電話番号がわかる。この差出人は太地町内に住む英国人で、日本語を話し、鯨料理も食べる人物である。

彼のこの行為に対して、町民の反応は様々であった。「とんでもないことをしてくれた」と立腹する人から、「町内に住んでいるのに真意がわからない」と不思議がる人。あるいは「彼と町民を分断し、もっと彼を協力的にさせるためにシー・シェパードが公開した」と考える人、さらには「彼が鯨料理を食べることに反発したシー・シェパードのメンバーが公開した」という見方をする人もいた。いずれにしろある程度地域に受け入れられてきた人物だけに、彼の行為は町民に複雑な感情を残した。

仲間2人の逮捕拘留を受けてシー・シェパードの活動家は太地から退去したが、同団体は2004年に入ってもホームページ上で「反イルカ漁キャンペーン」を続けている。2004年1月26日付で「太地、冷血にもハナゴンドウを殺す」というメディア向けの資料をインターネット上に公開しており、同資料によれば1月25日の早朝に太地町でハナゴンドウ7頭から10頭が捕殺されたとある<sup>43)</sup>。この情報は、2003年10月から11月にかけて約2週間太地町にシー・シェパードの活動家と共に滞在し、2004年1月再び太地町に戻ってきた別の団体に所属する人物<sup>44)</sup>からシー・シェパードに提供されたものである。同人物の手引きで2月5日には英国の新聞『ロンドン・タイムズ』の記者が太地町を取材、報道している<sup>45)</sup>。

シー・シェパードの活動家は年明け早々からのカナダでの「2004年反アザラシ漁キャンペーン」で多忙なせいなのか、太地町での「反イルカ漁キャンペーン」への第三者(ボランティア)の積極的な関与を呼びかけている(もちろん、寄付も)。再びポール・ワトソンの言葉である。

あらゆる社会階層の皆さんに新しい形態のエコ・ツーリズムに参画するように呼びかけています。自然の観察者になるかわりに、自然の防御者になることができます。カメラで武装してイルカを救うための戦いの前線に立てるのです。...求められているのは、太地におけるイルカ類に対する残虐行為を世界が目撃しつづけるために、人々が目と耳としてボランティア活動を行うことです。関心のある人々にとってのもう一つの方法は、世界のための証人として太地に赴く活動家を支援することです。この活動に寄付することを望む人々は「太地イルカ・キャンペーン」と特記してシー・シェパードに寄付することもできます<sup>46)</sup>。

シー・シェパードは「世界の海洋哺乳類にとって最も危険な地域」を10か所選定し、これらの地域を安全にすることをめざしている。第1位の荣誉に輝いたのがカナダのセントローレンス湾やニューファンドランド沖のアザラシ漁、第2位が日本の太地や富戸のイルカ漁、第3位が日本による南氷洋や北太平洋の鯨類捕獲調査である<sup>47)</sup>。

同団体の2003年の反アザラシ漁キャンペーンは同年3月に始まり、その参加者の中には第1節で言及したブルック・マクドナルド、アリソン・ランス・ワトソンの名前が見られる<sup>48)</sup>。この両名、2003年の春はカナダ大西洋岸沖でアザラシ漁従事者を追い回し、秋には太地で追い込み漁を妨害したのである。要するに彼女らは抗議運動で生活しているプロの活動家なのである。それだからこそ小競り合いの中で下着の中にフィルムを隠したり、あるいは逮捕を承知の上で仕切り網のロープを切断できるのである。彼女らを甘

くみてはいけない。

活動費が稼げるとわかったならば彼(女)らはとことんやる。カナダでの反アザラシ漁キャンペーンは1976年から続いている。それに関してポール・ワトソンは本も書いた<sup>49)</sup>。太地町でのエコ・ツーリズムが儲けになることがわかれば、彼(女)らはリピーターになるであろう。逆に言えば、損をすれば、あるいは儲からないことがわかれば、彼(女)らは来ない。

写真やビデオを撮影し、それをインターネット上で公開、活動資金を集める。それが彼(女)らの戦術であることはわかっている。私たちがまずすべきことは、彼(女)らおよび協力者の写真やビデオ撮影を封じ込め、資金源を断つことである。そのことが安全な鯨・イルカ類追い込み漁につながるである。

[付記]

「捕鯨文化の比較研究」を研究テーマとする筆者は1984年以降、継続的に太地町を訪れている。本稿の執筆の際にも2003年12月から2004年2月の間に計3回現地を訪れた。筆者は2004年3月から8月まで6か月間カナダで在外研究に従事したため、本稿は2004年2月中旬までに入手した資料を用いて、2月末時点でまとめたものであることをご承知おきいただきたい。

帰国後、校正の段階でシー・シェパード関連の文献を再チェックしたところ、一部のページ・アドレスが変更されていた。以下の注において<[http://www.seashepherd.org/media\\_](http://www.seashepherd.org/media_)>と表記されている箇所は<[http://www.seashepherd.org/news/media\\_](http://www.seashepherd.org/news/media_)>としてアクセスしていただきたい。

注

- 1) 『紀伊民報』2003年11月20日付。『毎日新聞』2003年11月21日付。
- 2) 『毎日新聞』2003年10月6日付。
- 3) Sea Shepherd Conservation Society, “Sea Shepherd Crew Return to Taiji despite Threats and Violence.” 26 Nov. 2003 <[http://www.seashepherd.org/media\\_031007\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031007_1.html)>.
- 4) 『紀伊民報』2003年10月18日付。
- 5) 注3)参照。フィルムを「下着」の中に隠すのに驚いてはならない。グリーンピースの活動家はかつて「臆」の中にフィルムを隠して持ち出した(ブラウン&メイ 1995:53)。これがプロの活動家である。
- 6) Sea Shepherd Conservation Society, “Taiji Dolphin Campaign.” 18 Dec. 2003 <<http://www.seashepherd.org/taiji.shtml>>.
- 7) Sea Shepherd Conservation Society, “The Last Samurai in Taiji.” 26 Nov. 2003 <[http://www.seashepherd.org/media\\_031024\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031024_1.html)>.
- 8) 『毎日新聞』2003年11月21日付。
- 9) 『紀伊民報』2003年12月10日付。
- 10) Sea Shepherd Conservation Society, “Prosecutor Agrees to Release Allison and Alex ...but Fines Sea Shepherd 800,000 Yen (\$8,000 US) for freeing dolphins!” 08 Dec. 2003 <[http://www.seashepherd.org/media\\_031206\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031206_1.html)>]
- 11) Sea Shepherd Conservation Society, “Japanese Police Seize Sea Shepherd Cameras and Film.” 26 Nov. 2003 <[http://www.seashepherd.org/media\\_031119\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031119_1.html)>.
- 12) Sea Shepherd Conservation Society, “Video: Activists Free Dolphins.” 15 Dec. 2003

- <[http://www.seashepherd.org/video/taiji\\_1.wmv](http://www.seashepherd.org/video/taiji_1.wmv)>, <[http://www.seashepherd.org/video/taiji\\_1.rm](http://www.seashepherd.org/video/taiji_1.rm)>.
- 13) Sea Shepherd Conservation Society, “Captain Paul Watson.” 26 Jan. 2004  
<<http://www.seashepherd.org/crew-watson.shtml>>.
  - 14) Sea Shepherd Conservation Society, “Pilot Whale Family Mercilessly Slaughtered at Taiji, Sea Shepherd Sends Reinforcements.” 26 Nov. 2003  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_031108\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031108_1.html)>.
  - 15) 注 3) 参照。
  - 16) Sea Shepherd Conservation Society, “About Sea Shepherd Conservation Society.” 26 Jan. 2004  
<<http://www.seashepherd.org/about-sscs.shtml>>.
  - 17) 注 13) 参照。
  - 18) 注 13) およびブラウン&メイ (1995:63-64) 参照。
  - 19) High North Alliance, “Sea Shepherd’s Record of Violence.” 08 Jan. 2003  
<[http://www.highnorth.no/Library/Movements/Sea\\_Shepherd/se-sh-re.htm](http://www.highnorth.no/Library/Movements/Sea_Shepherd/se-sh-re.htm)>.
  - 20) “Submarine in disguise will try to spoil whale hunt”, *Seattle Times*, 14 Sep. 1998.
  - 21) マカーのククジラ捕鯨再開運動の経緯については、浜口 (2002:40-44) にまとめてある。
  - 22) ポール・ワトソンは“sealkind”なる用語 (造語) を使っている。ここにも彼のアザラシ好きがよく表れている。次の文章を参照のこと。Sea Shepherd Conservation Society, “Sea Shepherd Launches 2004 Campaign to Protect the Harp Seals.” 18 Jan. 2004  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_040107\\_2.html](http://www.seashepherd.org/media_040107_2.html)>.
  - 23) 太地漁業協同組合の貝良文氏は太地漁協スーパーのホーム・ページ上で次のような文章を発表している (2003 年 11 月 1 日付)。「太地の伝統的な追い込み漁の漁師達は、またも今月始めエコ・テロリスト集団のメンバーにいわれの無い攻撃を受けた。しかもその不法侵入者たちは、追ってメディアに対して数世紀にわたる伝統に基づいた漁業に関する事実をねじまげて報告し、自らの行動についても勝手な報告をおこなった。彼らの行動は、所属団体の資金集めの機会を拡大するためのものと思われる」(26 Nov. 2003 <<http://www.cypress.ne.jp/jf-taiji/cgi-bin/press/index.cgi>>)。
  - 24) Sea Shepherd Conservation Society, “Sea Shepherd Conservation Society: Mission Statement.” 26 Jan. 2004 <<http://www.seashepherd.org/mission.shtml>>.
  - 25) 注 24) 参照。
  - 26) 「テロ」の定義などについては、首藤 (2001)、加藤 (2002) を参照のこと。
  - 27) 注 3) 参照。
  - 28) デクスター・ケイト事件については、以下の文献による。板橋 (1987:206-207)、ブラウン&メイ (1995:120-121)、川端裕人 (1997:70-90)。なお、デクスター・ケイトは後にダイビング中の事故で溺死している。
  - 29) 2003 年 12 月末に太地町で聞いた噂話で、本人たちに直接確認したわけではないが、逮捕された 2 人は留置中の食事があわず、「もう懲り懲り」と話していたそうである。
  - 30) Sea Shepherd Conservation Society, “Sea Shepherd Launches 2004 Campaign to Protect the Harp Seals.” 18 Jan. 2004 <[http://www.seashepherd.org/media\\_040107\\_2.html](http://www.seashepherd.org/media_040107_2.html)>.
  - 31) 太地町における捕鯨の歴史については、熊野太地浦捕鯨史編纂委員会 (1965) を参照のこと。

- 32) 「小型沿岸捕鯨」「突きん棒漁」「追い込み漁」の違いについては、浜口(2002:10-11)を参照のこと。
- 33) 岩崎・木白・加藤(2002:60, 表 2)、岩崎(n.d., 表 8)に基づいて作成。
- 34) 最近では 1999 年 10 月に捕獲があった。
- 35) 岩崎・木白・加藤(2002:60, 表 2)、岩崎・加藤(n.d., 表 7)、岩崎(n.d., 表 8)に基づいて作成。
- 36) 2003 年現在、日本で稼働している小型沿岸捕鯨船 5 隻のうち 2 隻は太地港を母港としている。そのうちの 1 隻の船主はシー・シェパードが太地町にやってきたことを知ると自らの捕鯨船に 24 時間の監視体制を敷き、その後、他町の人目につきにくい場所に船を移し、最終的にはまた別の町で陸揚げした。この捕鯨船はシー・シェパードから直接的な被害は受けなかったが、監視・移動にかかった経費はばかにならない。
- 37) ポール・ワトソンは捕鯨従事者やアザラシ漁従事者の行為をよく「サディスティック」あるいは「サディズム」として言及しているが、筆者は実は彼こそが血まみれのシーンを好むサディストではないかと考えている。以下の文章を参照のこと。Sea Shepherd Conservation Society, “Sea Shepherd Crew Return to Taiji despite Threats and Violence.” 26 Nov. 2003  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_031007\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031007_1.html)>. 文章中に“sadistic”の語句あり。  
“The Last Samurai in Taiji-Report form Nik Hensey.” 26 Nov. 2003  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_031124\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_031124_1.html)>. 文章中に“sadism”の語句あり。  
“Sea Shepherd Launches 2004 Campaign to Protect the Harp Seals.” 18 Jan. 2004  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_040107\\_2.html](http://www.seashepherd.org/media_040107_2.html)>. 文章中に“sadistic”の語句あり。
- 38) “Day of the Dolphin”, *Asiaweek*, 24 Feb. 1989, pp.42-51. 『60 頭』が解体されて『刺身』や『干物』に、和歌山県太地の『イルカ漁』解禁ショット』『フライデー』1990 年 10 月 26 日号、38-39 頁。
- 39) イルカ&クジラ・アクション・ネットワーク, 「太地イルカ捕獲中止を求める要望書を送ろう!」  
26 Nov. 2003 <<http://homepage1.nifty.com/IKAN/hogo/kogi/031031.html>>.
- 40) 藤原英司氏を代表者とする「エルザ自然保護の会」は 1993 年 10 月 30 日付の会報で次のように述べている。「捕鯨の『窓』を通してしか、イルカ、クジラを考えられない社会状況というのは、国際的に見た場合、地球の僻地に偏在する経済的に貧しい超少数小国のものであり、経済的發展をとげた文明世界では、ほぼ 30 年前に卒業してしまった社会認識です」(『ELSA 会報』52 号、8 頁)。こういう予断と偏見に満ちた団体が反捕鯨運動を行っているのである。
- 41) 動物の命を救う会, 「エルザ自然保護の会より緊急のお願いです」08 Feb. 2004  
<[http://www.taps.gr.jp/public\\_html/urgent/ikan/iruka-ryou02.html](http://www.taps.gr.jp/public_html/urgent/ikan/iruka-ryou02.html)>,  
<[http://www.taps.gr.jp/public\\_html/urgent/ikan/iruka-ryou04.html](http://www.taps.gr.jp/public_html/urgent/ikan/iruka-ryou04.html)>.
- 42) Sea Shepherd Conservation Society, “Unsung Hero of Taiji.” 26 Nov. 2003  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_031110\\_2.html](http://www.seashepherd.org/media_031110_2.html)>.
- 43) Sea Shepherd Conservation Society, “Taiji Cold-Heartedly Kills Pseudo Orca Whales.” 28 Jan. 2004  
<[http://www.seashepherd.org/media\\_040126\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_040126_1.html)>.
- 44) この人物(名前を書く必要はないので書かない)は 1960 年代後半に世界中でヒットしたイルカが主役のテレビ番組『わんぱくフリッパー』(筆者も見た記憶がある)でイルカの調教師を務め、その後はイルカ解放運動にかかわっている人物である。この人物の経歴等については以下のインターネット情報を参考にした。TimVP.com “Flipper.” 15 Feb.2003 <<http://www.timvp.com/flipper.html>>. サークリ

- ット, 「出演者プロフィール」 15 Feb. 2004 <<http://www.gem.hi-ho.ne.jp/circlet/profile.htm>>. キー・ウ  
 エスト, 「退役! 『兵器イルカ』はリハビリに悪戦苦闘の日々」 15 Feb. 2004  
 <<http://home.att.ne.jp/blue/FKworkshop/east/key.html>>.
- 45) Sea Shepherd Conservation Society, “The Dolphin Death Dance Continues in Taiji, The London Times  
 Observes the Slaughter.” 09 Feb. 2004 <[http://www.seashepherd.org/media\\_040207\\_1.html](http://www.seashepherd.org/media_040207_1.html)>.
- 46) 注 45) 参照。
- 47) Sea Shepherd Conservation Society, “The Ten Most Dangerous Places for Marine Mammals in the  
 World and What Sea Shepherd is Doing to Make These Places Safer.” 18 Jan. 2004  
 <<http://www.seashepherd.org/editorial13.shtml>>.
- 48) Sea Shepherd Conservation Society, “Seal Campaign 2003.” 26 Jan. 2004  
 <<http://www.seashepherd.org/campaign-current2.shtml>>.
- 49) ポール・ワトソンの自叙伝(WATSON 2003)には 1976 年の第 1 回反アザラシ漁キャンペーンから  
 1999 年の第 10 回反アザラシ漁キャンペーンまでの出来事が綴られている。1976 年の第 1 回キャン  
 ペーンでは日系人女性と氷盤上で寝袋を共にし(p.78)、1977 年の第 2 回キャンペーンではノルウェ  
 ー人女性をパートナーに選んでいる(pp.83-84)。特に、このノルウェー人女性とのセックス・シーン  
 (氷盤上ではないが)はポルノ小説も顔負けするくらい官能的に描写されている(pp.88-89)。1979 年  
 の第 3 回キャンペーンでは新しい恋人がシー・シェパード号上でアザラシ漁妨害のバック・アップを  
 務め(pp.113, 135)、後にワトソンはこの女性と結婚し、1 女をもうけている(p.184)。そして、1999 年  
 の第 10 回キャンペーンでは氷盤上からロサンゼルスにいる最新の恋人アリソンに電話をかけている  
 (p.235)。このアリソンこそが後に彼の妻となり、太地町の畠尻湾でイルカ類を囲んでいた網を切り逮  
 捕されたアリソン・ランス・ワトソンである。筆者は本自叙伝を読むまではポール・ワトソンを人間嫌い  
 の動物偏愛主義者と考えていたが、それは間違いであることがわかった。彼も女好きの普通の男で  
 あった。但し、多くの女性から愛されるということは、それだけ魅力的な人物なのであろう。筆者には  
 その魅力はわからないが…。

## 文献

ブラウン、マイケル & ジョン・メイ

(1995) 『グリーンピース・ストーリー』(中野治子訳) 東京:山と溪谷社。

浜口 尚

(2002) 『捕鯨文化論入門』京都:サイテック。

板橋守邦

(1987) 『南氷洋捕鯨史』(中公新書 842) 東京:中央公論社。

岩崎俊秀(編)

(n.d.) 「日本の小型鯨類調査・研究についての進捗報告 - 2001 年 6 月から 2002 年 4 月まで - 」  
 15 Feb. 2004<<http://www.jfa.maff.go.jp/whale/document/2001progressreportJP.pdf>>.

岩崎俊秀・加藤秀弘(編)

(n.d.) 「日本の小型鯨類調査・研究についての進捗報告 - 2000 年 5 月から 2001 年 5 月まで - 」  
 15 Feb. 2004<<http://www.jfa.maff.go.jp/whale/document/2000progressreportJP.pdf>>.

岩崎俊秀・木白俊哉・加藤秀弘

(2002) 「小型鯨類の管理」 大隅清治・加藤秀弘(編)『鯨類資源の持続的利用は可能か』東京:生物研究社、54-63 頁。

加藤 朗

(2002) 『テロ - 現代暴力論 - 』(中公新書 1639) 東京:中央公論新社。

川端裕人

(1997) 『イルカとぼくらの微妙な関係』東京:時事通信社。

熊野太地浦捕鯨史編纂委員会

(1965) 『鯨に挑む町 - 熊野の太地 - 』東京:平凡社。

首藤信彦

(2001) 『現代のテロリズム』(岩波ブレット 556) 東京:岩波書店。

WATSON, Paul

(2003) *Seal Wars: Twenty-five Years on the Front Lines with the Harp Seals*. Buffalo: New York, Firefly Book.

